

菅原傳授手習鑑

櫻丸切腹の段

後七〇・文樂座より

櫻丸切腹の段は「菅原傳授手習鑑」の三段目の切で、かの寺子屋の段の前段に當り喧嘩の段と合せて佐太村の段といふ、

佐太村に住む農夫四郎五郎改め白太夫は大恩ある菅相承の言葉に従ひ七十の賀の祝ひに舍人に出仕してゐる梅王、松王、櫻丸の三つ子夫婦を招待したが櫻丸は自分の過ちから菅相承が流罪になつたことを悔み、その申譯に切腹して果てるといふ父子夫婦の死別を描いた物語である

人形浄るり

淨るり……豊竹古鞆太夫

三味線……鶴澤清六

「櫻丸切腹」

六日の文楽中繼をきく、何といつても白太夫がシンだけに一番精彩があり津とも土佐とも異つたイキで熱と真情の溢れた獨特の風格が滲み出てゐた前半では「代官所の格で捌く」のあたりの地合の巧みさ、本來重い口を工夫で軽く捌いて行く手際、其處に余計妙味が湧く

の照應の妙趣實に味ふべきである。八重は艶消しの淡彩でありながら却つてそれが効果的で、生きてゐた。櫻丸も申分なし地合の風趣にしみる」と



▽……茶筌酒から脈をひく飄逸さが底を割らぬほどの悲しい色どりをつけて、後段の大悲歎の場と

うてほしかつた。

▽……念佛の件りは言ふまでもなく厭倦―悲痛な親心を二度も體驗してゐる演者の魂がすゝり泣いて名號を唱へてゐるのであらう。白太夫即古鞞太夫が渾然一如となつて然も藝術的感味を失はない。至藝である。こゝは土佐が伊達時代に大隅師に二晩も三晩もふつ續けに叩き込まれてへこたれたといふほどの難所だと聴くが、こんな所はいくら續けて教へ込まれたとて早急に旨くなれるはず

はない。修練のみによつて至り得る境地ではあるまい。藝境が完成の域に達し、人間が苦勞でねり上げられて出来てくると自然にうまくなれるのではないかと私には思はれる。

▽……「親人の鉦鼓に合せ夫婦の者が忍びの念佛」のところは間のびがして氣がぬけてゐた。白壁の微瑕か。段切の絶妙さはけだし贅言―、この人獨自の演奏に好もしき風韻を感じて全く魅了された。(中野孝一)

◇文楽にみる「櫻丸切腹」◇

